

## 大学院生によるアメリカの小中学校での 体験型海外教育実地研究報告Ⅳ

小原友行・深澤清治・朝倉 淳・松浦武人・松宮奈賀子・  
長江綾子・内田武瑠・梅田裕基・大下真理子・澤口陽彦・  
清水典子・庄本恵子・藤本翔子・山中法子・小倉恵美・前田愛弥  
(2010年12月3日受理)

### A Report on Overseas Teaching Practicum 2010 by Graduate Students in Elementary / Secondary Schools in the United States (Ⅳ)

Tomoyuki KOBARA, Seiji FUKAZAWA, Atsushi ASAKURA, Taketo MATSUURA,  
Nagako MATSUMIYA, Ayako NAGAE, Takeru UCHIDA, Yuki UMEDA, Mariko OHITA,  
Haruhiko SAWAGUCHI, Noriko SHIMIZU, Keiko SHOMOTO,  
Shoko FUJIMOTO, Noriko YAMANAKA, Emi KOGURA and Aya MAEDA

**Abstract.** The aim of the present paper is to report and reflect on the teaching practice in elementary / middle schools in the United States by a group of Japanese graduate students. As part of the requirement in an elective course in Overseas Teaching Practice 2010, the 8 Learning Science major students and 2 Social Studies major students of Hiroshima University, Graduate School of Education, planned and gave lessons in English on Japanese society and culture in the public school classrooms in the State of North Carolina, the United States in September, 2010. The major achievements in all the participants were 1) development of learning materials to enhance crosscultural understanding, 1) empowerment of crosscultural understanding through comparisons of Japanese/American cultures, and 3) development of global communicative competence through observations and presentations. Furthermore, an overall program evaluation was held for next year's program.

#### 1 はじめに

「体験型海外教育実地研究」は、広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター（略称はGPSC）が企画しているプログラム（2009年度からは教職高度化プログラムの選択科目）であるが、本年度は第4回目の実施である。本年度は、同プログラムを選択している者を中心に、博士課程前期1年の大学院生10名（初等8名，中等2名）が参加して行われた。また，参加者のアドバイザー兼評価者として，本プログラムの経験者である博士課程後期3年の大学院生も1名参加した。

この授業科目の目標は，次の3点である。

① 教員としての実践的指導力の向上を図ること。言語に頼らない授業実践が求められるため，児童・生徒の実態に応じた指導方法の開発・工夫が必要となる。

② 日本文化に関する教材を開発し，それをアメリカ合衆国ノースカロライナ州の公立小・中学校において英語で授業を行うという体験や，現地での経験豊富な教師の授業見学を通して，日米文化の相互理解を図るための教材開発の力を育成すること。

③ 体験型海外教育実地研究の企画・実施・評価の過程を通して，グローバル・パートナーシップを推進するために必要な資質を育成すること。授業は前期の集中科目であるが，年間を通したプログラムとなっている。具体的には，4月～8月の事前研究，9月11日～20日の米国ノースカロライナ州グリーンビル市内の公立小・中学校（ウォールコート小学校，エルムハースト小学校，C.M.エップス中学校）での教育実習と私立のピータース・カソリックスクール（幼小中一貫校）の授業見学，州都ローリー市内のエクスペローリス

中学校の授業見学および首都ワシントンDCでの多文化理解学習のための教材調査、そして10～11月の事後研究による教材の完成とレポート作成、12月の研究成果報告会となっている。

本年度の実施においては、GPSCのパートナー校であるイーストカロライナ大学教育学部のサンドラ・ウォーレン先生から格別のサポートをいただいた。また、実習校であったエルムハースト小学校、ウォールコート小学校、エッペス中学校および見学校であったピータース・カソリックスクール、エクスペローリス中学校の関係者には大変お世話になった。

以下では、本年度の概要、参加者の報告、本年度の評価について紹介していきたい。

## 2 2010年度「体験型海外教育実地研究」の概要

### (1) 全体日程

2010年度、本授業科目の実施状況（全体日程）は以下のとおりであった。

4月7日(水)	2010年度「体験型海外教育実地研究」実施説明会
4月22日(木)	本授業の概要と計画説明
5月27日(木)	授業研究テーマ案の発表
6月17日(木)	学習指導案の検討(1)
7月15日(木)	学習指導案の検討(2)
7月17日(土)	第6回学校間交流国際フォーラム参加
7月18日(日)	2010年度体験型海外教育実地研究授業研究ワークショップ参加
8月27日(金)	学習指導案の検討(3)および教材・教具の検討
9月2日(木)	学習指導案の検討(4)、教材・教具の検討および渡航のための諸手続き
9月8日(水)	渡航前最終打合せ
9月11日(土)～9月20日(月)	米国における体験型海外教育実地研究
12月16日(木)	「体験型海外教育実地研究」発表会

### (2) 現地での日程

9月11日から20日までの現地での日程は以下のとおりであった。

9月11日(土)	広島出発、米国ノースカロライナ州グリーンビル到着
9月12日(日)	授業準備および授業打合せ
9月13日(月)	グリーンビル現地学校訪問
9月14日(火)	グリーンビル現地学校訪問
9月15日(水)	St. Peter's Catholic School訪問、グリーンビルからローリーへ移動
9月16日(木)	Exploris Middle School訪問
9月17日(金)	ローリーからワシントンへ移動
9月18日(土)	ワシントン研修
9月19日(日)	ワシントン出発、機内泊
9月20日(月)	広島到着

### (3) 参加者およびグリーンビルにおける配置

本年度の「体験型海外教育実地研究」には、教育学研究科博士課程前期大学院生10名（内6名高度化プログラム生）が参加し、広島大学教員4名およびティーチングアシスタントとして広島大学大学院博士課程後期大学院生1名が引率に当たった。ティーチングアシスタントは自身もこの「体験型海外教育実地研究」に参加した経験を持ち、経験者として参加者のサポートを行った。現地での学校配置、担当者、参加者、引率教員は以下のとおりである。参加者は各校において準備した授業を実施した。

#### 【Elmhurst Elementary School (K-5)】

実施校担当者：Ms. Wanda Williams

参加者：内田武瑠・大下真理子・小倉恵美・澤口陽彦

引率者：松浦武人・松宮奈賀子

#### 【Wahl-Coates Elementary School (K-5)】

実施校担当者：Ms. Cindy Watson

参加者：梅田裕基・藤本翔子・山中法子・清水典子

引率者：朝倉 淳・長江綾子

#### 【C.M. Eppes Junior High School (6-8)】

実施校担当者：Ms. Rebecca Beaulieu

参加者：庄本恵子・前田愛弥

引率者：小原友行

## 3 参加者の報告

各参加者は、各校において実践した授業に関する「ねらい」、「概要」、「成果と課題」および授業の準備から実践を通じた「自己変容」について報告を作成した。次頁以降にこの報告を掲載する。

## 第2学年 異文化理解 “Wish on a orizuru”

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 内田 武 瑠

### 1 ねらい

本授業のねらいは、日本の伝統的な遊びの1つである折り紙に親しみ、折り鶴をつくることを通して、日本文化に興味を持たせることである。また、つくった折り鶴にそれぞれがどんな学級を望むかを書き、千羽鶴をつくってその思いを共有する活動を通して、誰もが楽しく思える学級を考えることもねらいとしている。

### 2 概要

本授業の導入では、まず、折り紙という日本文化について伝え、日本における千羽鶴の意味を伝えた。そして、折り鶴を作って、望む学級像をそれぞれが書くことを伝えた。ここでは、千羽鶴の持つ意味を伝えるために佐々木禎子さんの話を紹介したが、児童はその話について知っており、よく理解しているように思えた。また、児童が折り鶴や千羽鶴のイメージを持てるように、大きいサイズの折り鶴や千羽鶴の写真を提示した。



次に、折り紙と折り鶴のつくり方を書いたプリントを配り、1つ1つの手順を説明しながら折り鶴をつくらせた。児童が、1つ1つの折り方を繰り返し確認できるようにするために、すべての手順を折り紙で示したプリントを各グループ2枚ずつ計8枚配布した。また、教師用として模造紙の大きさと同様のものを提示し、見本の大きな折り鶴も用いながら説明を行うことで視覚的に折り鶴のつくり方がわかるようにした。なお、児童には通常のサイズではなく25cm×25cmの折り紙を配布した。

授業計画では、折り鶴を作成した後、その羽に名前と望む学級像を書かせ、学級で1つの千羽鶴をつくる予定だったが、時間が足りず折り鶴をつくるだけで授業が終わってしまった。しかし、児童たちは折り鶴をつくったことに大変満足している様子だった。授業の最後には、いろいろな折り紙のつくり方を説明した手作りの本と日本の児童が望む学級像を書いてつくった千羽鶴をプレゼントした。

### 3 成果と課題

本授業の成果は、児童が折り紙という日本文化について知ることができ、実際に折り鶴をつくることができたことである。渡米する前から、アメリカの子どもたちにとって折り鶴は難しいのではないかと危惧しており、そのために大きいサイズの折り紙や視覚、触覚で把握できるプリントなど様々な教具を準備していた。しかし、授業前日に担当するクラスが第2学年になるということを知り、日本の児童でも難しいことが、アメリカの児童たちにもできるか非常に不安だった。予想通り、折り鶴を完成させるのに約1時間もかかり、千羽鶴をつくるまでには至らなかった。だが、折り鶴をつくって嬉しそうにしている姿を見て、“平和”という扱いが難しい問題に触れなかったことが、実はよかったのではないかと思った。

課題としては、異文化の現状を理解した上で、異文化理解の授業を考える必要があった。先述したように、日本とアメリカでは平和へのイメージが大きく異なる。そのことに配慮した授業を展開するべきだった。

また、英語が全くといっていいほど伝わらず、担任の先生や教育実習中の学生に助けをもらう場面が多々あった。説明する言葉、注意を喚起する言葉などもっと吟味しておくべきだった。

#### 【自己の変容】

アメリカの子どもたちに授業を行うことで、言葉の大切さと言葉以外のコミュニケーションの大切さの両方に気づけた。何か説明する際に、言葉も重要なコミュニケーションの道具であったが、具体物やジェスチャー、表情なども視覚から得られる情報も重要なコミュニケーションの道具であった。アメリカの先生方は、ジェスチャーや表情が豊かであり、英語がすべてわからなくても、何を伝えたいのかを感じる事ができた。

また、コミュニケーションをとりようとする態度が相手を理解する上で重要だと思った。お互いが相手を理解しようとする態度が、受容的な雰囲気をつくり、コミュニケーションを助けるのだと感じた。アメリカの先生方のこのような姿勢を大事にしたいと思った。

### 第3学年 図画工作科 “Ukiyoe which connects the world”

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 山中法子

#### 1 ねらい

本授業のねらいは、海外の4作品の中から浮世絵の影響を受けたと思われる作品を選択し、その選択理由を述べる活動を通して、日本特有の文化・芸術だと思われがちな浮世絵が、海外の作品のモチーフや構図、技法などに影響を与えていることを理解することである。

#### 2 概要

本授業の流れは、大きく3つの部分に分けることができる。

##### (1)浮世絵の鑑賞と制作工程の紹介

まず、浮世絵に親しみ、興味を抱かせるために、「神奈川沖浪裏」の実物作品など複数の浮世絵を紹介した。次に、浮世絵の実物作品は世界各国の美術館に存在する事実から、浮世絵は版画であるということ伝えた。さらに、浮世絵の制作過程は絵師、彫師、摺師の3つのパートに分かれていることを知らせた。そして、摺師のパートについては、児童が実感をもって理解できるよう、その過程を体験させた。

##### (2)浮世絵が他国の絵画に与えた影響

ゴッホやモネ、メアリー・カサットの4作品の中から、浮世絵の影響を受けていると思われる作品を選択させた。また、選択理由について「①motif, ②composition, ③technique」の選択肢の中から選ばせた。4作品はすべて浮世絵の影響を受けている作品であるが、影響を受けていることが視覚的に分かりやすいものと、そうでないものの両者を選んでいる。上記の活動は、ワークシートを用いて個人個人で行った。その後、ワークシートを基に、クラス全体で1つ1つの作品についてどのような影響を受けているのか児童の発表を通して明らかにした。

##### (3)本時の感想

授業を通して印象に残ったこと、感じたことなどをワークシートに書かせた。また、筆者が授業を通して感じたことと今回の出会いについての思いを話し、授業のまとめとした。

#### 3 成果と課題

○浮世絵の制作過程について、児童が体験する活動を取り入れることにより、実感を伴った理解を促せた。児童は、版画で色を重ねていく過程に興味を持ち、完成した作品を見ると歓声をあげていた。

○言葉のみに頼るのではなく、浮世絵のコピーや実物、版画の実践など、視覚的に分かりやすいように工夫することが理解につながるようになった。

●3年生の児童にとって、浮世絵の影響について学ぶという内容は難しかった。初めて浮世絵を目にした児童が多く、浮世絵について十分な知識をもっていなかった。その中で、浮世絵は「モチーフ」や「構図」などの点で他国の絵画に影響を与えたことを学ぶことは児童の実態と合致しておらず、難しかった。授業設計をする際に、筆者が授業を通して伝えたいことと児童が学びたいことの間を埋めていく必要がある。

#### 【自己の変容】

本研修を通して、児童の発達段階などを的確に把握した上で、教師が授業を通して伝えたいことを明確にすることが重要であることを再認識した。また、どのような伝え方がより効果的な伝え方か考え、工夫することもとても大切である。例えば、日本語では言葉による説明に頼りがちになるが、英語では十分な説明ができないため、視覚的に分かりやすいような工夫が求められる。これらのことは、日本においても児童の理解を促す際に重要な点である。他国の方との交流は、もちろんノンバーバルコミュニケーションでも行えるが、より深い交流を行うためには言語が欠かせず、さらに英語を学習する必要性を感じた。



## 第4学年 異文化交流 “Let’s play ‘Hanetsuki’ !!”

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 藤本 翔子

### 1 ねらい

本授業のねらいは、日本の伝統的な遊びである羽根突きを体験することによって、他国の文化に興味を持つことである。また、羽子板や羽根には子どもの健やかな成長への願いがこめられていたり、お守りや魔除けとされていたりすることなど、伝統的な遊びには人々の願いや祈りが込められていることを知ることににより、形は違ってもどこの国でも同じ願いがあることに気づき、異文化を身近に感じることができるきっかけになればと考えた。

### 2 概要

まず自己紹介をし、羽根突きをしている絵を見せた。みんな興味を持った様子で何をしている絵かと言う問いに対して活発に発言していた。そして、羽根突きが日本の伝統的な遊びであると言うことの説明をし、それに込められた願いについても話した。

それから、羽根突きがどのようなものかと言うことを実際に前でやって見せた。ここでは、羽根突きには「追い羽子」と「貸しっこ」という2種類の遊びがあることを示した。

次に自分のオリジナル羽子板を作ろうと言うことで、羽子板に「My Favorite」というタイトルで絵を描かせた。子どもたちはみんな楽しそうに描いており、中には忍者を描いている子や、日本語での書き方を聞いてくる子どももいて、日本への興味の強さを感じることができた。

絵が描けたらベアを作り、羽根を配って実際に遊んでみた。しかし、羽根がすぐに壊れたり、羽根の数が充分でなかったりしたため、修理するのが大変で子どもの活動を見たり、声かけをすることがあまりできなかった。

最後に授業の感想を言い、子どもたちにも感想を書かせて終わった。

絵や感想の交流にも時間をとりたかったが、思ったように進まなかったため交流はできなかった。しかし絵を描くところや実際に遊ぶところをととても楽しんでいたように感じたので、そこに多く時間をさけたのは良かったのではないかと思う。

### 3 成果と課題

成果としては、子どもたちは絵を描くときも羽根突きをするときもとても楽しそうに活動していたことがあげられる。子どもたちが楽しめたという点では、学年に合った活動になっていたのではないかと感じた。

課題としては、やはり英語と言うことで自分の言いたいことがうまく伝わってない場面が多くあったことである。自分の英語力の問題に加え、どのくらいの学年がどの程度の言葉を知っているかが分からず、辞書で調べた単語では伝わらないことがあると言うことに気付かされた。アメリカの子どもだから英語であればどんな単語も分かるが無意識のうちに思っていたが、日本の子どもが難しい言葉を分からないように、英語も学年に合わせて言葉を選ばなければならぬと感じた。

#### 【自己の変容】

授業を行なう際に子どもにさまざまなことをわかりやすく伝えるには、やはり口頭だけでなく、ホワイトボードに書いたり、実物を見せたり模範を示したりといった視覚的なアプローチがとても有効だと感じた。日本でもそれは同じであるが、外国で思うようにコミュニケーションがとれず、飛び込みの授業という今回のような場面ではそのようなことを含めた事前準備や教材研究がより重要だと感じた。

また、その学年に合った活動をする、子どもたちが求めているものと教師側が教えたいこととのバランスも難しく、子どもの実態に寄り添った指導の重要性を学んだ。

今回の海外での学校訪問では、授業をする以外にも、授業観察をさせていただいたり、お話を聞かせていただいたりすることで、日本の教育についても考えさせられた貴重な体験となった。また、他の国の教育についてもさらに興味が強まった。

## 第4学年 異文化理解 “Let’s enjoy Mihara Daruma !”

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 大 下 真理子

### 1 ねらい

本授業のねらいは、日本文化の一つである、だるま、特に地方の文化である「三原だるま」の由来やそれに込められている人々の思いや願いを知ることによって、日本文化に興味をもつとともに、アメリカの子どもたちに自分たちの住んでいる地方の文化にも関心を持たせることである。また、自分の願いを込めて三原だるまに目や顔を描き入れ、全体に色付けをする体験活動を通して、いつまでも自分の夢をもち続け、その実現に向かって努力をしてほしいと願い本単元を設定した。

### 2 概要

- (1)自己紹介と本時の学習内容を説明した。
- (2)三原だるまの由来とそれに込められている人々の願いについて説明をした。
- (3)三原だるまの目と目の描き方の説明をした。
- (4)日本の子どもたちの願いや夢を紹介した。
- (5)三原だるまを全員に配った。
- (6)配布したピンクの紙に各自の願いや夢を書いた。
- (7)個人情報なので希望者が自分の席や前に出て自分の願いや夢について発表した。
- (8)筆者が三原だるまの片方の目だけ塗りつぶし、顔を描き入れ全体に色付けをして実際にやり方を示した。
- (9)自分の好きな色で、だるまに目、顔などを描き、全体に色付けをして全員が作品を完成した。
- (10)お互いに出来上がった作品の鑑賞をした。
- (11)担任の先生の今日の授業についての感想を聞いた。



子どもたちが大変熱心に意欲的に取り組み、とてもセンスのよい、カラフルな個性あふれる三原だるまが出来上がった。とても大事そうに、完成した自分のだるまを見ていた姿が印象的だった。紙に書いた自分の夢や願いの発表も積極的に行われ、授業が活発となった。

### 3 成果と課題

- 事前の担任の先生との打ち合わせがしっかりでき、本時の目標について理解が得られたので、担任の先生の支援がある中で予定通りに授業が進み、日本文化を伝えることができた。
- 三原だるまの説明では、だるまの大きな絵と握りだるまの実物を見せたので、だいたいイメージが掴めた様子で体験活動に興味をもたせることができ、最後まで全員が楽しく取り組むことができた。
- 日本の子どもたちの夢や願いの紹介は、アメリカの子どもたちが夢などを書く時に意欲付けになり、また、三原だるまの由来を理解することにもつながった。
- 夢の実現に向けて努力をしてほしいという願いは時間不足で十分に伝えることができなかった。
- 電子黒板を活用して、だるまの絵を描くなどすれば、もっと授業に変化がでたかもしれない。

#### 【自己の変容】

アメリカの学校を訪れることは数回あったが、アメリカの子どもたちに授業をするというのは初めての経験であった。担任の先生の日頃のすばらしい学級経営、基本的生活習慣や学習規律、学習指導の徹底がなされていて、授業が外国にもかかわらず大変やりやすかった。担任の指導力が重要であるということは万国共通であることを身をもって体験をした。

また、異文化理解をするにはお互いに同じ一つのテーマにかかわりあい、協働でそのことを成し遂げていくというプロセスを重視する協同学習も有効な学習方法であると確信した。

## 第5学年 異文化理解 “A Stamp as a small cultural ambassador which connects you and me”

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 清水典子

### 1. ねらい

本授業のねらいは、日本の普通切手とアメリカの普通切手を比較することを通して、それぞれの国の切手の特徴や切手のデザインの特徴に気づくことである。また、自分の住む地域の特徴を生かした切手のデザインを考えることを通して、自分の地域の文化や特徴に気づき、それをほかの人に紹介することができることもねらいとした。

### 2 概要

(1)波多見小学校や音戸町の特徴や波多見小学校の児童の様子について写真を使って紹介した。

(2)日本の普通切手に描かれている絵の一部分を見せ、「これは、みんなと波多見小学校の児童をつないでくれるある大事なものの一つです。何だと思いませんか。」という発問をした。しかし、児童には切手というイメージがなかなかわかなかったようで、最後はこちらが答えを示す形になった。

(3)日本の切手をカラーコピーしたものを示すと、児童から「おおっ」という声が上がった。アメリカの切手と並べて、日本の切手とアメリカの切手の違いを考えさせた。その後、日本の切手のテーマは何か質問すると、「生き物」「鳥」などの答えが出た。教師が「美しい水や動植物などの自然」なのだと説明すると、児童はうなずいていた。



(4)オリジナル切手を作ろうと投げかけ、まず波多見小学校の児童が書いた切手と、その説明になるような写真を提示した。その後児童に、ノースカロライナやアメリカの特徴を生かした切手の図案を考えさせた。最後は時間不足で、書けた図案を全員に持ち上げてもらい簡単に説明をさせて、授業を終えた。

### 3 成果と課題

成果としては、次のようなことがあげられる。日本の切手の美しさに気付かせたり、波多見小学校の児童の様子や児童の描いた切手の図案やメッセージを見ることで、日本に興味を持たせたりすることができたこと、切手の図案を書くことを通して、自分の地域や国を代表するものは何かを考えさせることができたことである。自分の生活している地域の公園、ショッピングセンター、大学を図案にしたり、ノースカロライナの山や、鉄道、海岸を図案にしたり、アメリカの旗を図案にしたりした児童もいた。それぞれの図案を交流する時間が少なかったが、児童が自分の地域の特徴や、自慢に思うものを改めて考える機会になったのではないだろうか。

課題としては、3点あげられる。1点目は授業内容が多かったことである。教材も多く、時間不足になった。日本とアメリカの切手をたくさん提示するのではなく、それぞれ1枚ずつを比較するなど、内容を精選する必要がある。2点目は、児童に授業の見通しを持たせる必要があることである。3点目は、発問や説明が十分にできなかったことや、児童から出た意見を十分に理解し授業に生かしていくことができなかったことである。

#### 【自己の変容】

今回、この授業のほかに3年生にも同じ教材で授業をさせてもらう機会に恵まれた。1回目より教材を減らし、発問を少なくしたことで児童とのコミュニケーションに余裕が生まれた。「これだけは伝えたい。」というめあてに向かう、本質的な発問や教材を精選することの大切さを学んだ。教師として経験を積んできているが、「指導演」や「発問」のあり方について改めて考える機会を与えてもらえたと思う。また、英語力に課題があるからこそ、それ以外を使って相手を理解しようとする気持ちが芽生えた。小さなことでも、心が通じたと分かった時の喜びはかけがえのないものになった。

## 第5学年 国語科 “Let’s Enjoy Old Japanese Tales!!”

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 梅田裕基

### 1 ねらい

本授業のねらいは、日本の昔話の紙芝居を体験することによって、日本の昔話や紙芝居というものを知り、日本とアメリカの文化の違いに興味をもつことができるようにすることである。

### 2 概要

授業内容としては、突然子どもたちの前で授業者が拍子木を打ち、紙芝居を演じ始めることから授業を始めた。その後、授業者自身の簡単な自己紹介、「紙芝居」の簡単な説明（歴史的な話や、その起源、方法など）を口頭で行い、子どもたちに一人一つ紙芝居を配った。その紙芝居を、二人組みで一人が演じもう一人が観客になるという活動を行い、感想を数人に発表させた。その後、全員に紙を配り本授業の感想を書かせ、授業者が前で演じた紙芝居「桃太郎」や子どもたち一人ひとりに配った紙芝居、そして英語で書かれた『まんが日本昔話』1～5巻をクラスにプレゼントし、授業を終えた。

### 3 成果と課題

成果としては、まず、教材研究の過程で、紙芝居に関する知識を得ることができたことが挙げられる。以前から自分の研究分野である絵本の読み聞かせと関連が深いと意識し、研究の必要性を感じていた紙芝居の分野について、先行研究にあたり、そこから得た知識は、今後の糧となっていくであろう。また、紙芝居の絵を授業者自身で描いたことも、大変貴重な経験であった。

課題としては、大きく述べると、授業の内容の吟味が足りなかったことが挙げられる。授業が早く進んだ場合には、どのような活動をプラスするかについて考える必要があっただろうし、もし思うように進まなかった場合にはどんな活動を削るかについて考える必要があったと思う。具体的に述べると、授業者自身や紙芝居についての説明の段階で、もう少し模造紙などを使ってプレゼンした方がわかりやすかっただろうし、早く紙芝居を演じ終わった二人組への対応や、机間指導でどんな声かけが有効だったかということも、考える必要があったであろう。また、最後に余った時間に、授業者の授業全体に対するコメントも考えておくべきであったであろう。この課題の一因としては、追い込まれた際に、何でも自分以外のせいにしてしまう授業者自身の性格が挙げられる。反省至極。

もう一つの課題としては、言語に関するものが挙げられる。実際に授業をすることで、自分がどれだけ言語に頼っていたのかを思い知らされた。子どもたちの反応を読みとることが難しく、自分の表情や身振り手振りによる動作の乏しさがその一因だったのではないかと思う。紙芝居におけるパフォーマンスは、読み聞かせでの読み手のパフォーマンスと共通するところがあるので、もっともっと練習して読み手、演じ手としてのスキルを上げていきたいと思った。

#### 【自己の変容】

多忙な日々の中で、本研修が、何となく楽しかった思い出として風化してしまいそうになっていた。しかし、今回、報告書を作成する中で、アメリカで撮った写真を見返し、自分がアメリカに行く前に授業内容の検討での試行錯誤を書き記したプリントを見返したお陰で、“アメリカでの経験があったからこそ今の自分がある”と実感できた。やはり、何事もフィードバックが大切である。追い込まれた際に、何でも自分以外のせいにしてしまう癖を自覚し、改善していこうと思えたことが一番の自己の変容と言えるかもしれない。



## 第5学年 異文化理解 “Let’s enjoy ‘MAKURA-NO-SOSI’ ”

教育学研究科学習科学専攻学習開発基礎専修 澤 口 陽 彦

### 1 ねらい

本授業のねらいは、日本の古典文学である「枕草子」を読み、それを受けて日本の子どもたちが作った「枕草子」を読むことで、日本人の四季や自然に対する感じ方を知るとともに、自ら作成することで、身近な自然を振り返り、日本人との感じ方の違いについて考えることである。

### 2 概要

はじめに、教材となる部分である「枕草子」冒頭を読んだ。日本語と英語の双方が書いてあるワークシートを配布し、段落ごとに授業者が日本語を読み、児童に英語の部分を読ませた。これによって日本語のリズムを感じさせるとともに、枕草子の原作について知ることを目的とした。次に枕草子について簡単に説明し、日本の四季の美しさを情景などとあわせて紹介しているということをつかませた。さらに、日本の子どもが創作した「枕草子」を原文と同じように日本語、英語の順で読み、日本の子どもたちの感じる四季について考えさせた。その後、本時はアメリカ版を創作するということを伝えた。創作は、それぞれ四季を選び、自分の好きな場面についてイメージを広げ、それを言葉にした。さらに、日本の子どもたちへ創作したものを持って帰り、紹介するために、と画用紙に色ペンを使い書かせた後、主題に即した絵も描かせた。



### 3 成果と課題

日本の子どもたちが創作した「枕草子」を読んだとき、児童たちは食い入るように作品の写真を見つめ、授業者の話も聴いていた。本時において、枕草子の原文だけでなく、日本の子どもたちが創作したものを子どもたちに読み、写真で提示したことは、児童の興味関心を高めるために非常に有効であったと考えられる。また、本時にアメリカ版を創作すると伝えたとき、児童たちはすぐに思いつき、挙手をして発表をしていた。なかなか思いつかなかった場合に、ということでブレインストーミングするためのワークシートを用意していたが、そのワークシートは結局使う必要がなかった。これは、原文の4季節分と、日本の児童の創作4季節分を読んだことで、より枕草子の主題が捉えやすかったことと、創作内容に特に縛りを設けなかったことが要因であると考えられる。

しかし、短時間での実践だったため、枕草子について深く説明できず、日本の子どもたちが創作したときに学習した視点移動や色彩感覚、古文調などの枕草子の特徴といえる部分への理解や作品への反映などはできず、結果的に作品が表面的な美しさに偏ってしまったことが考えられる。時間数が確保できる場合、より原文を深く読むことで、創作にも活かせるようにしたい。また、ワークシートへの創作から、画用紙での表現までを一連の流れでしてしまったため、作業の個人差が大きくなってしまったために、発表・交流する機会をとることができなかった。自分ひとりの作品だけではなく、友だちの作品を鑑賞することが、日本人との違いを感じ取るために重要であると考えられるため、このようになってしまったのは致命的な失敗といえる。ワークシートへの創作が完成した時点で交流の時間をとることができれば、その後の画用紙への表現でも、より日本人にあてて書くということを意識できたかもしれない。

#### 【自己の変容】

今回一番学んだのは、子どもたちを信頼し、なるべく子どもの力を使うことの重要性である。授業の初めに、自己紹介と共に授業者が十分な英語力を備えていないこと、しかし、児童がそれを十分補ってくれるほど親切であると信じているという話をした。結果として、様々な場面で児童が助けてくれた。それは、お互いの「伝えたい」という想いと、「分かってほしい」という想いが十分に満ちていたためであると考えられる。このように、子どもたちの力をリソースとして捕らえ、共に授業を「創っていく」という姿勢が授業創り、学級創りに非常に重要になってくると考える。

## 第8学年 社会科 “Make the Crossword Puzzle”

教育学研究科科学文化教育工学専攻社会認識教育学専修 庄 本 恵 子

### 1 ねらい

本授業のねらいは、日本の世界遺産に関するクロスワードを通して、生徒が日本の文化について知り、興味を持つことである。

### 2 概要

まず、子どもたちが日本の文化についてどの程度知っているかを確認するために、パワーポイントで日本の有名なものを見せた。そして、日本の世界遺産についてのオリジナル冊子を使い、日本の世界遺産のクロスワードを各グループで解いていった。その後、各班でクロスワード作りに取り組み、半分のグループがクロスワードを完成させたところで授業を終えた。

### 3 成果と課題

本授業の成果は、1つのオリジナル教材を作ったということ、そして日本の文化を紹介する際に「世界遺産」という世界で共通のトピックを扱ったという点にある。オリジナルの教材としては、日本の「世界遺産」について、私自身がつたないながらも英語で冊子を作成した。また、異文化交流というと、自分達の文化がいかに他の文化と違うかという点に注目しがちであるが、世界の人々が共通の基準を設けて選定されている「世界遺産」を教材として扱うことでグローバルな視点を授業内容に取り入れたことが成果であるといえよう。

課題は大きく2つ挙げられる。1つ目の課題は、授業準備に関する課題である。今回の授業準備では、自分が話す言葉をきちんと英語に訳し、模擬授業を行うといった入念な授業準備ができていなかった。そのため、生徒に伝えなければならない内容をきちんと伝えることができなかつたのである。実際に授業をする中で、英語で伝えるのが難しい場合には、事前にどのようにすれば生徒たちが目で見えて理解できるのかをしっかりと考えておく必要があると痛感した。2つ目の課題は、生徒たちの学習レベルの想定ができていなかったことである。今回のように、生徒の様子が具体的に想定できない状況で授業を行う際には、学習内容に幅を持たせ、柔軟に対応していく必要がある。授業者自身も、言葉で正確にコミュニケーションを取ることが出来ないという状況を考慮し、授業の教材内容をもっとシンプルでわかりやすいものにしておくべきであった。今回の「世界遺産」という教材については、私が授業を行ったクラスでは知っている生徒がほとんどおらず、まず世界遺産とは何なのかという説明が必要という点で戸惑ってしまった。解決の方法としては、事前に授業を行うクラスでアンケート等を行い、生徒たちが授業内容(扱う教材)についてどの程度の知識を持っているのかを確認するという手法が考えられる。アメリカの子どもたちが日本についてどの程度の知識を持ち、どんなところに関心を持っているのかを事前にリサーチすることが出来れば、より子どもの実態に即した授業作りが可能になるであろう。

#### 【自己の変容】

本授業実践を通して、知らないものに興味を持ち、新しいことを知った時には嬉しい気持ちになるという子どもの素直な学びを見ることが出来た。ぜひ、日本でも生徒たちがわくわくした気持ちになってくれるような授業がしたいと思うようになった。そのためにも、授業準備での課題、授業のテーマ設定の課題、指導法の課題などをもう一度見直し、言葉で伝わるからこそ手を抜いてしまう部分に対するきめ細やかさを持てるようになりたい。

#### 4 本年度の授業の評価

##### (1)本年度の授業と事前の取り組み

2010年度体験型海外教育実地研究（米国ノースカロライナ州）において実施された授業は、次の通りである。

表1 実施授業の学年と教科等

	学年	教科等, 題材・テーマ*
A	2	異文化理解 Wish on a orizuru
B	3	図画・工作科 Ukiyoe which connects the world
C	4	異文化理解 Let's play "Hanetsuki"!!
D	4	異文化理解 Let's enjoy Mihara Daruma!
E	4	国語科（書道） Let's challenge calligraphy
F	5	異文化理解 A Stamp as a small ambassador which connects you and me.
G	5	異文化理解 Let's enjoy "MAKURA-NO-SOSI"
H	5	国語科 Let's Enjoy Old Japanese Tales!!
I	6	異文化理解 Shape of Chinese Character that is made using letters in the English Alphabe
J	8	異文化理解 Make the Crossword Puzzle

\*「教科等, 題材・テーマ」は、参加者（授業者）が付したものであり、授業を実施した当該校にとっては教育課程外の投げ入れ授業として位置づけられるものである。

参加者は、日本での事前学習において、授業の目標、内容、教材、学習過程などについて相互に協議・検討し、具体的な準備を進めた。また、英文の指導案を作成し、イーストカロライナ大学のウォーレン先生から直接助言をいただきながら、指導計画の改善を図った。その際、授業実施学年については、参加者の希望と指導内容を考慮して決定した。

現地では受け入れ校の関係教員と事前の打ち合わせ会を行い、授業を実施するクラスを事前に観察することができた。このことにより児童・生徒の姿をイメージしながら最終的な指導計画の調整を行い、授業に臨むことができた。さらに、授業B, Fについては、学校訪問初日と2日目に、同内容の授業を異なるクラスで実施する機会を得

た。初日の授業を反省し、具体的な改善案を練り、2日目の授業に生かすことができた。

授業を実施するにあたり、このように事前に多くの時間を費やし、参加者間の協議・検討や現地の先生方の助言、さらには授業反省に基づく授業改善を繰り返し行うことができたことは、本実地研究の一つの成果であると考ええる。

##### (2)授業についての評価

本年度の授業について、主な成果と課題を以下に示す。

###### ① 異文化理解を促す新たな学習材開発

浮世絵、だるま、枕草子、はねつき、昔話等、参加者は専門領域の特性を生かしながら、これまでの実地研究では素材とされていない日本文化の理解を促す新たな学習材を開発することができた。しかしながら、各々の日本文化の有する豊かな価値について、予備知識のない米国の児童・生徒が1単位時間という限られた時間枠の中で理解を深めていくことは難しいことである。授業の目標、内容、方法をより焦点化・明確化し、米国の児童・生徒が日本文化とのかかわりを無理なく楽しみながら、発達段階に相応しい価値に触れることができるようにしたい。

###### ② 日米の比較による異文化理解

授業Aでは日本の児童が望む学級像を、授業Dでは日本の児童の夢や願いを、授業Gでは日本の児童が創作した枕草子を、また授業Fでは日本の児童が創作した切手を米国の児童に紹介している。何れの授業においても、米国の児童は日本の児童のものの見方・考え方に強い興味関心を示している。比較の場を設定することにより、それぞれの国の文化やものの見方・考え方の共通点や相違点が明確になる。つまり、他国の文化への理解とともに自国の文化への理解を深めるためにも有効なものとなる。米国の児童・生徒が創作した作品を用いての授業を日本においても実施し、その成果を比較・検討したい。

###### ③ 多様な表現を用いたコミュニケーション

参加者の多くは、言語（英語）による表現を補うために、現実の映像や絵図、具体的な操作や試演、分かりやすいモデルの提示、身振り手振りなど、様々な表現の工夫を取り入れたり関連づけたりしながら授業を行った。外国語や母国語の言語能力そのものを高めることは、教員のグローバル

な資質や能力を高めることに違いないが、たとえ高い言語能力を有していたとしても、また母国での授業においても、言語のみに頼らない多様な表現の工夫と関連づけに努め、児童・生徒の学習内容の理解を一層深めたい。

ここに示した成果と課題は、異文化間コミュニケーションを重視した授業構成力及び実践的指導力の向上につながるものと考えられる。

## 5 受講生への質問紙調査による「体験型海外教育実地研究」の成果と課題

2010年9月に実施された米国での第4回体験型海外教育実地研究では、成果と課題について検証するため、プログラムの前後に参加者に対して質

問紙調査を実施した。

### (1)方法

調査対象：2010年度体験型海外教育実地研究の参加者10名。

調査時期および調査手続き：事前の調査は、2010年9月11日の集合時に、事後の調査は、帰国後の2010年9月下旬に調査用紙を配布し、回収した。なお、回答は記名で行われたが、得られたデータは調査以外に使用することはない旨を伝え、記入者各自で厳封もしくは個別回収の形を取り、プライバシーの保持に努めた。回収率は事前調査100%、事後調査80%であった。

調査内容：調査内容・質問形式と平均値・標準偏差については表2に示す。

表2 調査内容・質問形式と平均値・標準偏差

質問内容	回答形式	平均値	標準偏差
<b>【事前調査】</b>			
I. ご自身について			
1) 教職経験、2) 海外渡航回数、3) 英語力	該当項目選択		
4) 今回の「体験型海外教育実地研究」でどのような力を身につけたいか			
①異文化間コミュニケーションを図るための教材開発力	7段階評定	6.1	0.88
②異文化の相互理解を図るための教材開発力	7段階評定	5.9	1.2
③グローバル教育推進に必要な能力（グローバルマインド）	7段階評定	6.3	0.67
5) 日米それぞれの教育観・自分自身・グローバルマインド等について、現在自分自身が感じている	自由記述		
II. 授業について			
1) 授業を通してどのようなことを子どもたちに伝えたいと考えているか（授業の目的）	自由記述		
2) そのために、教材研究・指導法・教具等においてどのような工夫をしているか	自由記述		
3) 現在感じている不安の程度			
①英語力についての不安	7段階評定	6	1.33
②授業実践についての不安	7段階評定	5.7	1.6
4) 現地で授業をするにあたって、現在感じていること その他	自由記述 自由記述		
<b>【事後調査】</b>			
I. ご自身について			
1) 今回の「体験型海外教育実地研究」でどのような力が身についたと感じるか			
①異文化間コミュニケーションを重視した実践的指導力	7段階評定	4.75	0.89
②異文化の相互理解を図るための教材開発力	7段階評定	4.625	0.916
③グローバル教育推進に必要な能力（グローバルマインド）	7段階評定	5.38	0.92
2) 「体験型海外教育実地研究」を経験して自分自身が感じていること			
①教育観について	自由記述		
②自分自身について	自由記述		
③グローバルマインドについて	自由記述		
II. 授業について			
1) 授業実践に対する評価			
①授業実践の進行のスムーズさ・苦勞について	7段階評定	5.25	1.91
②授業実践の達成感について	7段階評定	4.375	1.506
③授業実践の課題について	7段階評定	6.25	1.39
2) 授業を通してどのようなことを子どもたちに伝えることができたと感じているか	自由記述		
3) 実際の授業では、指導法・教具等どのような工夫をしたか	自由記述		
4) 今後日本で授業実践を行うとしたときのモチベーションについて			
①英語力の向上について	7段階評定	6.75	0.463
②授業実践の実践力について	7段階評定	6.75	0.71
③他者とのコミュニケーションの積極性について	7段階評定	6.63	1.06
④異文化理解の実践の積極性について	7段階評定	6.75	0.463
5) その他、授業を終えて現在感じていること	自由記述		
III. 学校見学・文化体験等（授業実践以外）について			
1) 学校見学においてどのようなことを感じたか	自由記述		
2) 文化体験においてどのようなことを感じたか	自由記述		
3) 現地の人のかかわりや参加者とのかかわりにおいてどのようなことを感じたか	自由記述		
IV. 今後「体験型海外教育実地研究」をよりよくしていくための改善点について	自由記述		
その他	自由記述		

## (2)結果と考察

### ① グローバルマインドおよびコミュニケーションに関する変容

事後調査の「どのような力が身についたと感じるか」という項目については、グローバルマインドの項目が5.38と最も高い結果となった。自由記述においては、事前調査ではグローバルマインドに関する回答は少なく、あっても「よく分からない」というものであったが、事後調査では「自己表現をできる子どもを育てることが国際貢献の第一歩かもしれない」、「他国を知ることで自国のこともよく分かる」、「平和って何だろうと考えた」、「視野を広くもつことの重要性」など、今回の経験がグローバルマインドについて視点を向ける大きなきっかけとなったことが考えられる。

コミュニケーションに関しては、英語に関する不安や英語力の向上についての値が高かった。自由記述においても、「英語の必要性を感じた」という回答が複数みられた。一方で、英語が難しかったとしても「チャレンジすることはとても大切だと思った」、「お互いが伝え合おうとすればつながっていく」などコミュニケーションに対する姿勢において影響があったことをみることができた。特に学生参加者においては、コミュニケーションの積極性が全員7であり、今回の経験が英語やコミュニケーションへの意欲の向上において効果があったと考えられる。

### ② 授業に関する意識

授業実践への不安については、学生は6.1、現場経験者は4と最も差が大きい結果となった。自由記述においても、現場経験者は「少ない時間なので的を絞る」、「シンプルな授業にどこまで興味をもつか」という授業の構成に関する内容であった一方で、学生は「どれだけ通用するのか」「どう受け取られるのかなど全然分からなくて不安」など授業そのものに対する不安の回答が多くみられた。また、授業後に調査した授業課題についても、学生は6.6、現場経験者は5と学生の方が高い結果となった。授業課題に関する自由記述では、「丁寧に授業を組み立てることの大切さ」、「用具だけでなく自分の考えをしっかりとつべき」、「伝えたいことと発達段階に適した学習の距離を埋めていくことの必要性」などがみられ、本授業が実践的指導力の向上につながる機会になったと考え

られる。

具体的な授業の工夫については、「目で見て分かるようにしよう」「言葉で説明するよりもイメージが大切」など、視覚情報の工夫に関する回答が多くみられた。また、活動の多い授業にする、ワークシートの活用、実物を見せる、など言語に頼らない工夫についての回答もみられた。これに関する質問項目、授業実践力の向上と異文化理解実践の積極性も6.75と高い結果であり、多様な表現力の育成や今後の教育活動に対する意欲の向上に効果があったと考えられる。

### ③ 総合的な考察

質問紙調査の結果から、本授業科目はその目的に即した成果をあげていると総括できよう。一方で、教職経験の有無によって差異がある項目もあることから、それぞれの参加者のキャリアに応じたアプローチも必要であると考えられる。

## 6 おわりに

本年度を含めこれまでに4回の「体験型海外教育実地研究」を実施してきた。この間、本授業科目の基本的な構成は変えていない。しかし、内外の情勢については政治経済のレベルでも関係学校のレベルでも刻々と変化している。また本授業科目の受講生の状況も毎年異なる。その年度の状況に応じることとともに、授業科目の基本的な構成についても定期的、継続的な検討が必要であることが明らかとなった。今後の課題としたい。

本年度の研究では、参加経験を有する大学院生によって授業実施補助とデータ収集、分析がなされた。事実上のメンター機能が発揮されたことは、今後このようなプロジェクトを実施するときのポイントとなるであろう。

## 〔参考文献〕

- 朝倉淳・林万青也・小原友行・深澤清治・神山貴弥「テディベアプロジェクトによる国際理解教育に関する一考察」、『学校教育実践学研究』第14巻, pp.139-145, 2008
- 朝倉淳・小原友行・深澤清治・松浦武人「国際化社会に対応する教師教育・教員養成のための教職国際化プログラムの開発研究」, 広島大学大学院教育学研究科『共同研究プロジェクト報告書』第8巻, pp.33-40, 2010

- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか  
「大学院生によるアメリカでの体験型海外教育  
教育実地研究報告」,『学校教育実践学研究』第  
13巻, pp.43-56, 2007
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか  
「大学院生によるアメリカでの体験型海外教育  
教育実地研究報告Ⅱ」,『学校教育実践学研究』  
第14巻, pp.39-53, 2008
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか  
「大学院生によるアメリカでの体験型海外教育  
教育実地研究報告Ⅲ」,『学校教育実践学研究』  
第16巻, pp.95-104, 2010
- 広島大学GPSC『グローバル・パートナーシッ  
プを推進するための人材育成およびプログラ  
ム開発(2006-2007)』米日財団奨学寄付金事  
業成果報告書, 2007
- 広島大学GPSC『平成19年度体験型海外教育実  
地研究参加者成果報告書』, 2008
- 広島大学グローバル・パートナーシップ・スク  
ール・プロジェクト研究センター「広島大学  
グローバル・パートナーシップ・スクール・  
プロジェクト研究センター ご案内」(パン  
フレット), 2009